

【デザインノート】

桜新町ねぶたプロジェクトの記録

田村圭介・加藤真友・村田 望・吉永有美子

1. はじめに

本プロジェクトは、世田谷区桜新町の「まちづくり」を主眼としている。「ねぶたづくりを通してのまちづくり」と書いたほうが正確だ。意匠的デザイン好きの学生が集まっているので、ねぶた自体も趣向を凝らしたが、そのデザイン性は、まちの人々と一緒に作れる施工性という面を踏えてのものであった。

桜新町でワークショップをさせていただくのは、今回で4回目となった。学生的设计製図の課題を学外で行い、学生のフレッシュなアイデアで地域貢献し、学生にとっては地域というリアルなフィールドで活動を行うということをしてきた。1回目は商店街、2回目は準工業地域、3回目はねぶたづくりの提案、4回目の今回は、ねぶたづくりの実践というように展開してきた。

「まちづくり」とは具体的には、すでに古くから桜新町に住んでいる在来住民と、新しく桜新町に移り住んできた新規住民との交流を生み出すということである。日本全国で、流動的かつ大量の新規住民によるマンション化の波により地域性が破壊されていく。桜新町もご多分にもれずと言いたいだが、地元を愛する在来住民のがんばりは目を見張

るものがある。そのひとつが7年前から始めた「桜新町ねぶた祭」だ。

2009年に世田谷区主催の「桜新町準工業地域活性化ワークショップ」にて、まちの交流の機会づくりに、桜新町でねぶたを作ることを提案させていただいた。賛否両論があったものの、桜新町の人々のバックアップがあって、その提案が「2010年桜新町ねぶた祭」で実現した。本稿は、その「ねぶたづくり」の記録である。

桜新町の人々の大きな肩に乗っかせていただき、本プロジェクトはスタートした。何度かのまちの方々とのワークショップで、在来住民と新規住民の交流の機会づくりには子供がキーであることが分かった。また、青森にねぶたを注文しており、桜新町でねぶたを作っていないことが分かった。「子供たちの心に残るまち」ってどうやったらできるのかと、できる限りの知恵を使い、汗水流し、桜新町の皆さんとともに、昭和女子大学の学生がねぶたを作った。

青森の「安田ねぶた会」のねぶた魂を受け継ぎ、商店街から出た使用済の割りばしを使い、子供たちが書いた三千枚の切り絵メッセージを乗せて、季節外れの残暑の夜、桜新町商店街でねぶた「白鷺草」は、かすかだが確かな輝きを放った。



桜新町ねぶた祭: 祭前のざわめき

2. 全体構想: さくらねぶたものがたり



①桜新町の人々がねぶたのパーツづくり



②作ったパーツが集まってねぶたになり



③ねぶた祭の夜



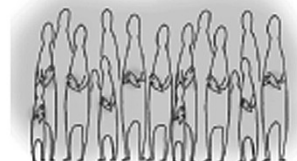
④運行中にパーツをまちの人々に配り



⑤まちに散らばったパーツは



⑥祭の記憶を呼び覚ましたり、会話のきっかけとなったり



⑦そして新たなつながりを作り出す

桜新町には、名前の由来にもなっているように多くの桜が植えられている。今でこそ日本全国で楽しむことのできる桜だが、もともとそうだったわけではない。江戸時代末期に品種改良によりソメイヨシノが生み出され、初めの1本からどんどんと株分けされて北海道から沖縄まで全国に広がり、今では日本を象徴する花になっている。この桜の木が全国に広まっていった話からインスピレーションを受け、今回のねぶたプロジェクト全体のコンセプトを『個→全体→個→新たな全体』とした。この、小さなものが集まってひとつのものを作り、それがまた分散していくことでまちをひとつにするという一連の流れを、住民の方々にも分かりやすいように、「さくらねぶたものがたり」としてストーリー化した。(上図)

内容としては、①同じ桜新町に住んでいても普段あまり接点をもたずに生活している人々が、ねぶたのパーツづくりに参加することによってつながる。②更にそのパーツは集まって桜新町で作られる初めてのねぶたとなり、③④ねぶた祭の夜、運行中にそのパーツがまちの人々に配られる。⑤祭が終わるとまちも人もそれぞれまたもとの生活へ戻っていくが、配られたパーツは街中に散らばっていったまま残っていく。⑥日常生活でそのパーツを見かけたときに祭の記憶が呼び起され、人々の会話のきっかけとなり、⑦新たな人々のつながりを作り出し、既存住民、新規住民という枠組みのなくなった新たな桜新町を形作っていく、といったものだ。(数字は上図内の番号に対応する)

このストーリーを用いて、まず2010年6月16日に桜新町の集会場でねぶた祭の主催・運営を行っている桜新町商店街振興組合の方々にプレゼンテーションを行った。そこで商店街の方々からコンセプトへの理解を得たうえで、次の段階として地域住民にねぶたづくりを協力してもらうために、桜町小学校・深沢小学校・深沢中学校の各学校長とPTAの方々に集まっていたいただき、6月25日にプレゼンテーションを行った。このプレゼンテーションでは、ねぶた自体の安全対策や年齢に合わせたパーツ制作の難易度を設定するべきなどといった意見をいただき、のちのねぶたの形の決定やワークショップの運営にフィードバックされることとなる。

「さくらねぶたものがたり」の中で登場する「パーツ」は、小中学生が無理なく作れることや祭の当日に配れることなどを考慮して、切り絵とそれを入れる袋とした。この切り絵には作ってくれた人の夢がそれぞれ書かれている。ねぶたは、桜新町の人々の夢が綴られた衣をまとい、まちを練り歩き、その後みんなの夢は桜新町の人々の手に渡り、新たな人々のつながりを作り出すための懸け橋となる。また、そのパーツを取り付けるための部材は、桜新町商店街の飲食店で使われた割りばしを再利用し、主に小学校中学年以上の子供たちに参加してもらって作ることにした。ねぶたの主材料である、和紙の代わりに切り絵袋を、針金の代わりに割りばしを使い、桜新町を象徴する新たなねぶた「割りばしねぶた」の構想ができた。

3. 形のコンセプト

ねぶたの具体的な形を検討していく中で議論に上がったのは、抽象的な形をした現代の新たなねぶたを作るか、伝統ねぶたを作るか、それとも伝統ねぶたの作り方でいままでほとんど作られてこなかった女性ねぶたを作るか、ということだった。桜新町で作る初めてのねぶたということで、今までの伝統にとらわれずに桜新町オリジナルのねぶたを作ろうという方向性で固まりかけていた。しかし、それを変えたのは本場のねぶたを見に行っておくべきだろうと計画した「青森ねぶた合宿」での経験だった。本物のねぶたの迫力に圧倒された我々は、伝統ねぶたの要素なくしてはねぶたになり得ないのではないだろうかという結論に至った。

そこで、桜新町の新たなねぶた「割りばしねぶた」と古くからある青森の「伝統ねぶた」の二つを融合させた、伝統を継承しつつも新しい形のねぶたを提案することとなった。

■二つのねぶたを繋ぐものがたり：白鷺草

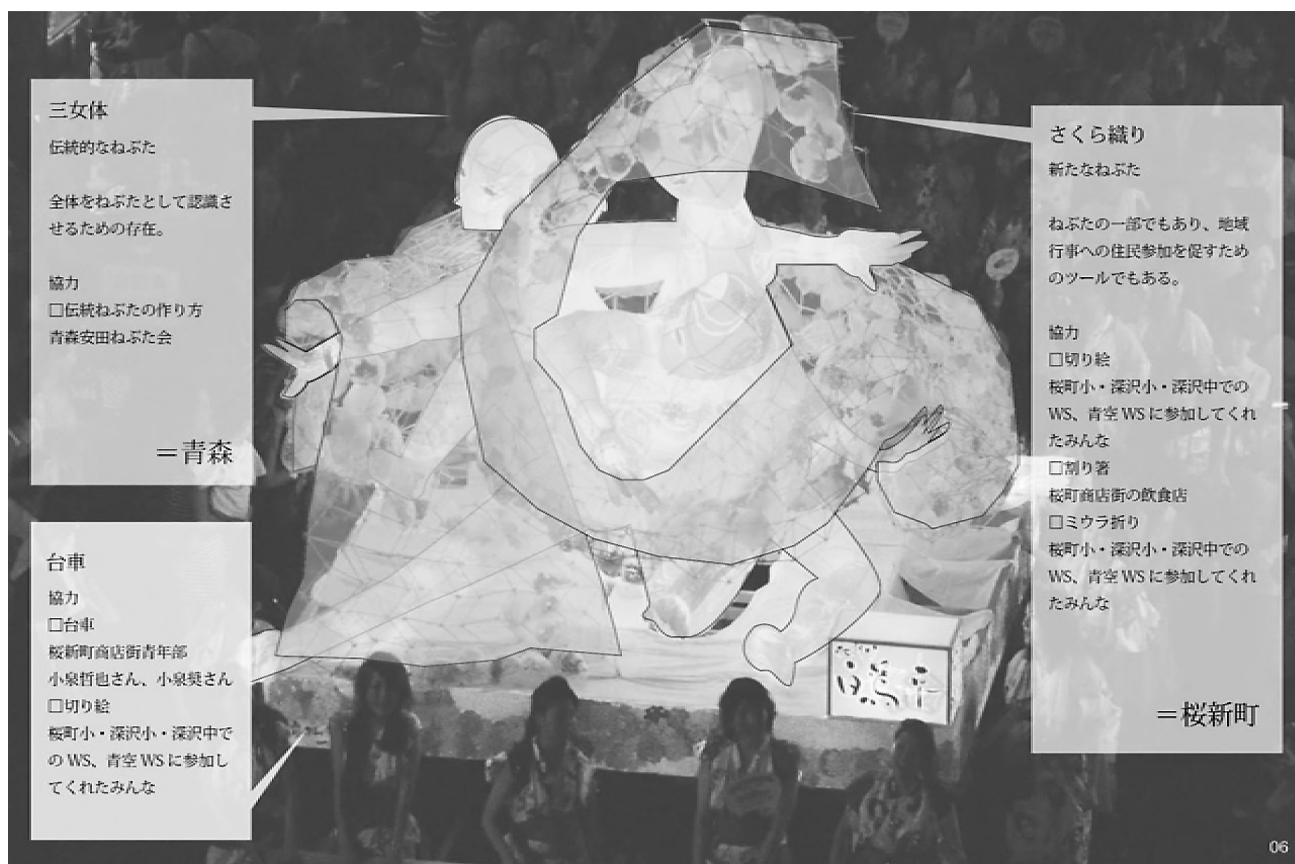
室町時代、世田谷城主7代目の吉良頼康は、世田谷の奥沢城主、大平出羽守の娘、常盤姫をみそめ、側室に迎え入れた。頼康は常盤姫だけを大事にしたので、他の側室たちは常盤姫を妬み、常盤姫を追いつために協力して城中一の美男と評判の内海掃部と恋仲であるという噂を流した。

噂は頼康の耳に届き、常盤姫は飼いならした白鷺の脚に手紙を結びつけて父に救いを求めようとしたが、見張りの者達に見つけられ、可哀想にも死んでしまう。そして、常盤姫が飛び立たせた白鷺もまた、矢で射られて死んでしまった。その白鷺の落ちて死んだところから、白鷺の姿をした1輪の美しい花が咲いたという。（『世田谷城下史話』人見輝人著および http://www.city.setagaya.tokyo.jp/030/pdf/26703_2.pdf を参照）

「割りばしねぶた」と「伝統ねぶた」をひとつのねぶたにするため、この「白鷺草」という世田谷にまつわる伝承を造形のモチーフとした。伝統ねぶたのほとんどは男性の武勇伝を表現しているが、このものがたりの主人公である常盤姫とねぶたをなぞらえて、女性のねぶたを制作することにした。

「伝統ねぶた」は三女体にし、全体像をねぶたとして認識させる視覚的な役目を担う。また、三つの体はそれぞれ悲しむ・願う・愛するという常盤姫の感情の変化を表現している。

「割りばしねぶた」のさくら織りの衣（着物）は、ねぶたの一部でもあり、地域行事への住民参加を促すためのツールでもある。三女体をやさしく包み込みつつ、ねぶた祭のダイナミックな躍動感を表している。



二つのねぶた

4. ワークショップと青森ねぶた合宿

■ワークショップ

地域の子供から大人まで様々な人を巻き込んで、切り絵・ミウラ折り・色付けなどのワークショップを開催した。作業日程、参加人数は以下の通り。

桜町小学校ワークショップ: 2010/7/13・820人

深沢中学校ワークショップ: 7/20・370人

深沢小学校ワークショップ: 7/28～30・60人

桜町小学校夏祭りワークショップ: 8/28・30人

ねぶた小屋あおぞらワークショップ: 8/7, 8/21, 9/4・60人

桜新町周辺の小中学校の協力により、各学校内でのワークショップを開催することができた。限られた時間でスムーズに作業が進むよう綿密なスケジュール表と子供にわかりやすいマニュアル（深沢中学校 WS 写真参照）を作成し、事前に準備しておくこととした。各教室にねぶたプロジェクトチームの学生が3, 4人出向き、30分という限られた時間内に準備、説明、作業援助、切り絵回収、後片付けを行った。切り絵のデザインは自由にしてもらい、メッセージや自分の夢や希望を書いてもらった。

ねぶた小屋あおぞらワークショップは、地域の掲示板、桜新町商店街や小中学校内にポスターを掲示し、希望者を集めた。予定していたねぶた小屋の老朽化や設備不足が問題となり、隣の空き地にテントを張り、そこで行われた。テントの設置は桜新町商店街の人々の協力をかりた。ワークショップ開始前に、ねぶたプロジェクトチームに毎回のワークショップのスケジュール表を配り、今まで行ったワークショップの内容を把握させ、前回の改善点を認識させた。このワークショップでは、切り絵だけでなく、ミウラ折りの作成も行い、実際にさくら織りの一部に使用した。

数回にわたるワークショップで作られた切り絵は、ねぶたの着物となる袋の中に入れ、柄として使用したり、ねぶたを載せる台車の装飾に使用した。四面ある台車縁には、一面ずつ桜町小学校、深沢小学校、深沢中学校、ねぶた小屋で作った切り絵をそれぞれ貼り付けた。

■青森ねぶた合宿

2010年7月17日～20日に実際青森へ行き、「安田ねぶた会」の方々に伝統ねぶたの作り方を学んだ。針金による成形、和紙貼り、染色方法、ハネト（踊り手）の浴衣の着付け方を教わった。また、夜に行われたねぶた祭成功祈願祭に参加した。教わった各作業の手順は以下の通りである。

伝統ねぶたづくりの手順

①針金による成形

1. 両手で均等に力をかけながら、横にスライドするように徐々に針金を曲げていく。
2. ペンチで切った針金の切り口は鋭いので隠れるようにたっぷりボンドを染み込ませた糸を力を入れて巻きつける。

②和紙貼り

1. 成形された針金に歯ブラシでボンドを塗る。
2. 和紙（奉書紙）を貼り、針金に沿ってカッターで切る。

③染色

1. パラフィン（ろう）を熱でとかし縁どりをする。
2. 染料と水性顔料を使い、筆やスプレーで染色をする。



青森ねぶた合宿



深沢中学校 WS



あおぞら WS

5. プロジェクトの流れ（2010 年 4 月～11 月）

| | 全体スケジュール | 作業工程 |
|------|--|---|
| 4 月 | 桜新町さくらまつり デザインミーティング（企画立案） | 「地域の人々と作り上げていくねぶた」をコンセプトとして決定 |
| 5 月 | デザインミーティング（企画立案） | ねぶた全体の形のエスキス 材料の検討 割りばしの形状のエスキス 学校 WS 計画 |
| 6 月 | デザインミーティング（企画立案） 桜新町商店街へプレゼン 桜小学校・深沢小学校・ 深沢中学校の校長先生へプレゼン ねぶた小屋見学 | 割りばしのモックアップ 袋と切り絵のエスキス |
| 7 月 | デザインミーティング（企画立案） 青森ねぶた合宿 桜町小学校 WS 深沢中学校 WS 深沢小学校 WS | ねぶたの伝統的な作り方を習得 全体の形は三体の女性が舞う形に決定 →図面作成，模型で検討 割りばしの形状はミウラ折りに決定 ミウラ折り，切り絵制作開始 ねぶた小屋あおぞら WS のポスター掲示，チラシ配布 |
| 8 月 | 区民まつり ねぶた小屋あおぞら WS 桜町小学校夏祭り | 女体のねぶた製作開始（大学） ・ねぶたの構造軸組の制作 ・針金成形 ・電球配置 ・体部分の和紙貼り ・桜町小学校夏祭り，ねぶた小屋あおぞら WS ブース計画 |
| 9 月 | 桜新町ねぶた祭 | ねぶたをトラックでねぶた小屋へ移動 ・顔部分の和紙貼り ・パラフィン着色，表情の筆入れ ・台車組立 ・割りばし装着，衣（袋）入れ 完成・運行・片づけ |
| 11 月 | 昭和女子大学秋桜祭 | 活動記録ブックレット製本作業 ねぶた小屋から大学まで移動 展示・解体 |

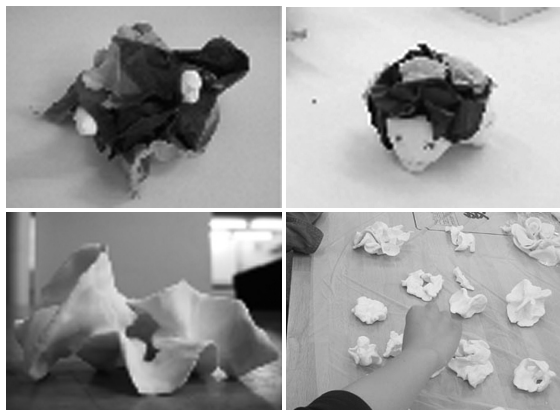
6. 形の検討

■形

新たな挑戦として女性ねぶたの制作を決定した。

・エスキス 1・・・抽象的なねぶた

オリジナルのねぶたとして、本来のものとは全く違った抽象的な形を作ろうと考えた。ねぶたの迫力と女性の華やかさをどのように出すかを考え、紙粘土や和紙などを使って形を検討した。

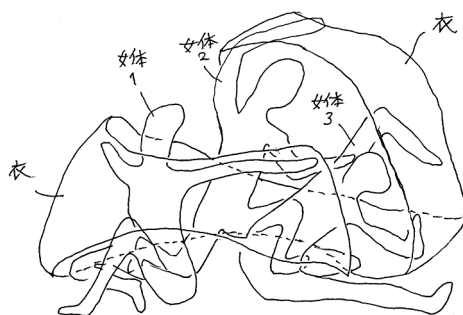


抽象的なねぶたの案

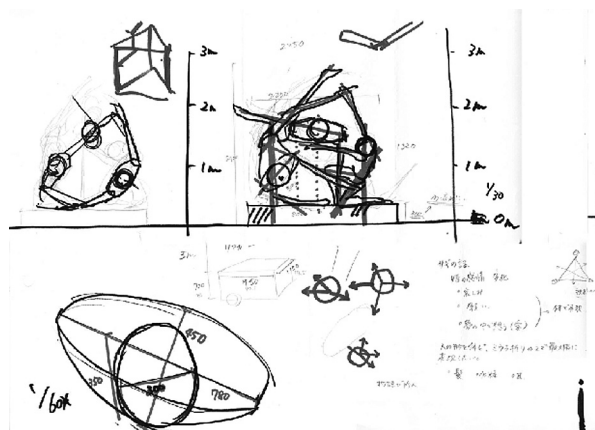
・エスキス 2・・・三女体ねぶた（決定）

現地青森でねぶたの歴史に触れ、ねぶたは男性の武勇伝が表現されていると知り、我々のねぶたにも伝統的要素を入れるべきだと考えた。また、ハネトの躍動感を体感し、それも同時に表現することを試みた。

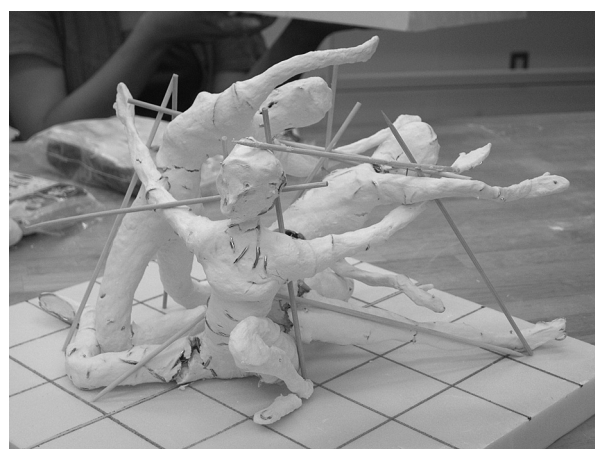
更に、桜新町オリジナルのねぶたとして世田谷の伝記に登場する女性（白鷺草）のイメージを取り入れることにした。伝記で登場する女性の感情（愛・願い・悲しみ）を表現するために、3体の女性を制作し、それぞれの感情をテーマに形を決定していった。ダンス・日本舞踊などを参考に人間の動きを研究し、手や足の動きで女性（白鷺草）の繊細で力強い様子を表現させた。構造的にも安定したものを作るため、実際にポーズをとってみることで、関節の動きや無理のない体の形を探っていった。



3体の女性



意匠と構造の検討



軸組の検討

感情を表現する目と、髪の毛の流れをパラフィンで描いた。パラフィンを塗った部分は光を通すため照明を点けると光って見える。なお、伝統ねぶたではパラフィンに加え、墨汁や塗料を使用し着色するが、我々は白鷺草のイメージである白を取り入れたかった事と、切り絵の色を引き立てるため、あえて塗料での着色はしなかった。



パラフィンを塗る

躍動感を増すために、ねぶたの着物の部分を伝統ねぶたとは別々に作ることにし、この部分を桜新町の人と制作しようと考えた。制作するにあたって多くの人が同時に作業できるよう、材の扱いやすさを念頭に置き、組み合わせによって形の可能性が無尽大にあることから割りばしを使用した。また、着物の模様は地域の小中学生が制作した切り絵を使い表現した。

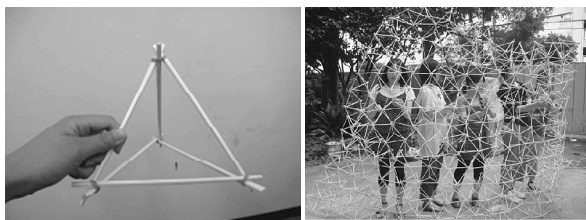
割りばしと切り絵については以下に説明する。

■割りばし

ねぶたの「着物」部分。割りばし同士を輪ゴムを使って接続することによって形を作る。意匠・構造・施工性を総合的に考慮しエスキスした。

・エスキス1・・・テトラタイプ

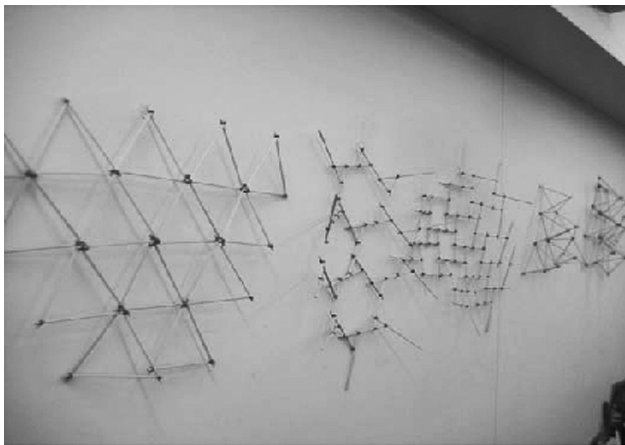
テトラ（三角錐）を作り、テトラ同士をつなげる。割りばしの組み方を工夫することによって、強固な構造となる。しかし、それゆえに可変性がなく、少し力を加えると崩壊してしまう部分があるため、「着物」を表現するには向いていない。



テトラタイプ

・エスキス2・・・格子タイプ

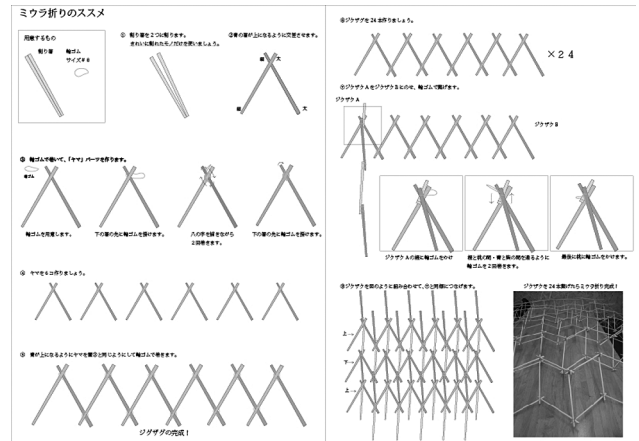
割りばしの接続の法則を変えることによって様々なタイプの格子を作ることができ、HP シェルとなる。しかし立体感が無く、形も限定されてしまうため、動きを表現するには向いていない。



格子タイプの検討

・エスキス3・・・ミウラ折りタイプ（決定）

本来のミウラ折りタイプの「折り」の部分を割りばしで構成する。これ自体で構造の役割は果たせないが自由な形態を作り出すことができ、布の動きを表現することに適している。また、輪ゴムのかけ方によって作り出せる形や強度が変わるため、このタイプの中でもエスキスを繰り返し、最終的にもっとも適合するものを見つけ出し、採用した。



ミウラ折りタイプの作り方



ミウラ折りタイプ

■ミウラ折り（ミウラおり）とは

三浦公亮氏（東京大学名誉教授・文部科学省宇宙科学研究所）が考案した、地図の折り方で、対角線部分をもって、さっと左右に引っ張れば一瞬にして広がり、たたむのも瞬く間、という簡単便利なものである。現在、各方面で活用、実用化がスタートしている。

(<http://www.miuraori.biz/hpgen/HPB/entries/2.html>)

■ パーツ

地域の小学生・中学生と一緒に作るねぶたのパーツについて検討した。パーツを制作するにあたっての条件は以下の通り。

1. 小学生低学年でも制作できるもの
2. 祭の運行中に配ることができるもの
3. 渡された人がそれを見てまちとの関わりを感じるもの

・エスキス 1・・・うちわ案

うちわに絵を書いてもらう。しかし、ねぶた本体との接続がうまくいかないことと、予算の問題があり、断念した。

・エスキス 2・・・テトラパック案

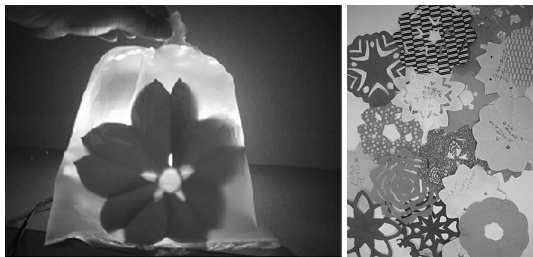
割りばしでのテトラタイプと同時進行で制作。紙を折り、牛乳パックのテトラパックの形を作り、色を塗ってもらう。しかし割りばしのミウラ折りタイプに決定したため、採用されなかった。

・エスキス 3・・・袋案

透明な袋に絵や思いを書いてもらう。この案を小学校・中学校・商店街合同の打ち合わせでプレゼンテーションしたところ、PTAの方から、小学校1年生ではつるつるしたビニール袋に絵を描くのは難しい、マジックが大量に必要になるなどの意見が出た。また、校長先生から袋の中に紙を入れて配るというアイデアをいただいた。

・エスキス 4・・・切り絵案（決定）

エスキス3をプレゼンテーションしたときに出了案を踏まえて、透明な袋に入れるものを検討した。桜新町のイメージである「桜」と、ねぶたプロジェクトチームのメンバーの一人が過去に切り絵を利用したイベントに参加したことがあったことから、桜の形をした切り絵を制作し、子供たちの夢や希望を書いてもらうことにした。切り絵の作業は、小学校低学年の子供たちには簡単にできるようなマニュアルを作り、中学生には図形に関するクイズを作って、どの学年でも楽しんでもらえるような工夫をした。

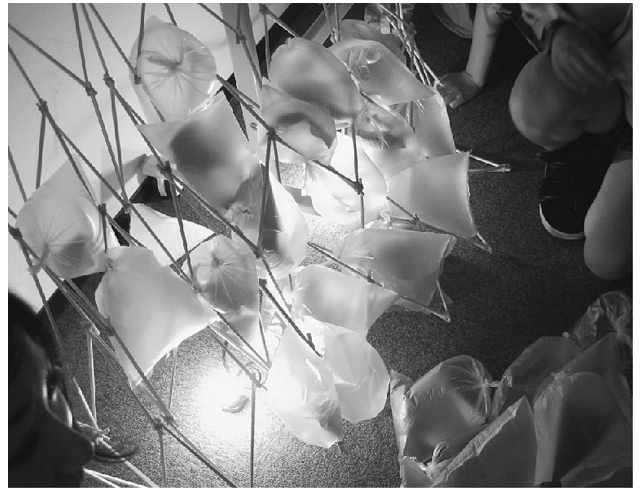


切り絵袋と切り絵

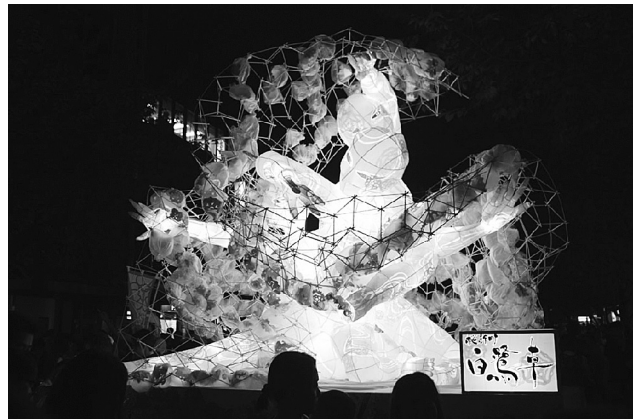
■ 割りばしと切り絵と袋

ねぶたの構造になっている木材に、割りばしを支える金具を取り付け、ねぶたの周りに割りばしの着物をまとわせ

る。躍動感を表現するように割りばしを固定したら、次に着物の模様を表す切り絵を入れた袋を割りばしの隙間に入れる。袋と割りばしはパンの袋を閉じる時に使うプラスチック製品（バッグクロージャー）を使用し、固定した。



袋には切り絵の他にハネトが身につける鈴も入れて、祭当日ねぶた運行中に配った。



ねぶた「白鷺草」の完成形

なお、ねぶた「白鷺草」を作るために以下の材料を使用した。

- ・木材（角材）…ねぶたの構造
- ・針金（＃16，＃14，＃12，＃10）…ねぶたの骨格
- ・和紙（奉書紙）…ねぶたの表面
- ・糸…針金同士を接続するもの
- ・ボンド…接着剤
- ・パラフィン…ねぶたの表面に流れを描く
- ・割りばし（桜新町商店街から出た使用済みのもの）…

ねぶたの衣

- ・輪ゴム…割りばしを接続するもの
- ・ビニール袋…ねぶたの衣
- ・折り紙…ねぶたの衣（子供たちの思い）
- ・電球…照明

7. 作 業

ねぶたの制作作業は、作業効率を考慮して昭和女子大学大学構内と、ねぶた祭の行われる桜新町にあるねぶた保管用の小屋（通称ねぶた小屋）の二ヶ所で期間を分けて行われた。

■大学構内

針金の成形、ねぶたの構造である軸組みの組み立て、針金の取り付け、電球の配線、一部の和紙貼りまでを学内で行った。

期間は2010年8月4日～9月4日。

軸組みは3m×3mの格子状に組んだ角材をベースとして、その上に組み立てていった。図面には起こせないため、軸組模型を参考にしつつ、主に桜新町商店街からいただいた端材を組み合わせて作っていった。現場合わせの作業も多く、実際に作ってみて強度的に問題がありそうな箇所はポーズを変更するなどして対応した。

軸組作りと並行して、三女体の体を針金で成形していく作業を行った。軸組みが完成したあとに取り付け、さらに微調整をして和紙を貼るための下地が完成した。

その後、電球の設置を行った。電球は軸組みが影となって和紙に映り込まないように注意しながら設置した。それでも出てしまう影を消すのと、少ない電球でも明るさを確保するために、軸組みの角材にアルミホイルを巻く工夫をした。

桜新町のねぶた小屋へ運ぶために、破損しやすい部分を除く一部の和紙貼りまでを行って、大学構内での作業を終了した。



模型を見ながら、軸組みにワイヤーを取り付けていく

■桜新町ねぶた小屋



ねぶた小屋前での作業の様子

針金の取り付けまで行ったねぶたは桜新町のねぶた小屋までトラックで移動し、その後の和紙貼り、ミウラ折りの取り付け、彩色、切り絵の袋入れ、袋の取り付けの完成までの工程を行った。

期間は2010年9月4日～9月11日。

輸送のために一度取り外した針金等を付け直し、残りの部分の和紙貼りを行った。

同時進行で彩色作業が行われた。伝統ねぶたでは主に染料などが彩色に用いられているが、今回はパラフィンのみとし、和紙の裏側に入れたセロファンに切り絵の透過色での彩色とした。

その後、「割りばしねぶた」を設置した。割りばしねぶたは単体では自立しないため、ある程度形状を維持するために両端に竹ひごを取り付けた。あらかじめ軸組みに取り付けておいた金具と割りばしねぶたを結び付ける。

最後に切り絵と鈴を入れた袋をミウラ折りに取り付けた。切り絵袋はねぶた運行中にまちの人に配るため、パンの袋などを閉じるときに使うバッグクロージャーを用いてあとから取り外ししやすいように工夫した。

ねぶた祭当日、運行用の台車の上にねぶたを載せる台上げを行い、桜新町で初めて作ったねぶたは完成した。



台上げの様子

8. 祭当日から解体まで

■祭当日

日時: 2010年9月11日 18時45分～20時45分

本場青森のねぶた、桜新町の「サザエさんねぶた」とともに、我々が制作したねぶた「白鷺草」は運行した。来場者数は約6万人であった。運行ルートは以下の通り。



ねぶた運行ルート

桜新町商店街では祭当日にまちを練り歩くハネトを募集しており、地域の住民の方々、小中学校の子供たち、合宿でお世話になった青森の方々と一緒に我々もハネトとなり参加した。運行中、「ぼくが作ったねぶただよ!」「昭和女子大学の生徒が作ったんだ」などの見物客からの声が聞かれた。

祭中盤から後半にかけ、子供たちの思いが入った袋を住民たちに配った。我々が配布している中、一般の住民の方々が自らねぶたから袋を取っていく行動が起こり、一部ねぶたが破損した。大量の袋は、手が届かない一部分を除いてすべて無くなった。



運行中のねぶた



切り絵袋をねぶたから取る

■秋桜祭

昭和女子大学の秋桜祭前日の深夜、ねぶたを桜新町から大学構内まで国道246号を通り、運搬した。

秋桜祭でねぶたの製作過程とねぶたを展示した。製作過程は大学1号館6L32教室で、今までのエスキス、ワークショップで使用した道具など説明ボードを加え、展示した。ねぶたは80年館の前に展示し、夜にはライトアップした。来場者には桜新町の方々もいた。



秋桜祭展示



246号を走るねぶた

■解体

秋桜祭の翌日、ねぶたを解体した。

解体中、通りがかった小学部の生徒たちに、残っていた袋を配った。また、使用した割りばしは再び桜新町の小学校へ回収され、学校で開かれたキャンプファイヤーに使用された。

ねぶたは、死者を祭る灯籠流しから派生したものであるという一説があり、我々のねぶたも同じような運命をたどったと言えるであろう。

9. 参加者

■指導教員

田村圭介

■コアメンバー

浅野美香
大滝ともみ
大竹聡子
大谷早希
加藤礼子
加藤真友
木部和可奈
平井史華
深谷美波
村田望
山本実可子
吉永有美子

■DP メンバー

鈴木千晴
梶原杏奈
山崎亜美

■制作メンバー

ルリ・シルビア

■制作・WS アシスト

岡千尋
竹内麻世
加藤舞
水上明子
保坂純子
郷原悠加
永塚恩奈
後藤友香
井野由美子
山田安紀
中谷更
中島瞳
高橋優貴
市川深生
宮部瞳
島脇早紀
本田枝里子

林奈津美
中田麻美
黒沼祥子
簾内聡美
清水泰末
佐藤ひとみ

■スペシャルサンクス

桜新町商店街のみなさん
青森安田ねぶた会のみなさん
桜町小学校のみなさん
深沢小学校のみなさん
深沢中学校のみなさん
ワークショップに参加してくださったみなさん
長谷川町子美術館
橘倫央
横須賀洋平

(たむら けいすけ 環境デザイン学科)
(かとう まゆ 生活機構研究科環境デザイン研究専攻2年)
(むらた のぞみ 生活機構研究科環境デザイン研究専攻2年)
(よしなが ゆみこ 生活機構研究科環境デザイン研究専攻2年)